

壁にぶつかることもあるはず。
そんなときは、1度そこから離れて、
自分が本当は何をしたかったのかを
思い返してみるといいかも。

自分はどんな世界を作りたいのか？

私は教育学部だったのに、教職課程をとりませんでした。専攻したのが実践系ではなく、“教育とは何か”などを考える教育哲学を学ぶところで、師事した先生も「脱学校化」「学校とは経済システムの一部に過ぎない」という考え方でした。それで学校だけが教育じゃないと思うようになり、あえて教職の道は選択しなかったんです。といっても、今やっていることも広い意味では教育だととらえています。先に結論めいたことを言うようですが（笑）。

私の人生に大きな影響を与えたのは、5歳上の姉の存在でした。姉は音楽や絵などの表現活動が好きで、高校の合唱部で才能を認められて音大推薦の話がありました。けれど両親は自分たちが経済面で苦労したこともあり、「娘にはいい学校に入って、サラリーマンと結婚し、裕福な生活をさせたい」と猛反対。姉はやりたいことをやらせてもらえず、鬱病になってしまったんです。

そんな姉を傍から見ていた私は「幸せであるとはどういうことだろう」と考えるようになり、心理学やカウンセリングに興味を持ちました。そして、生きづらさや心の病は、元をたどれば社会が作り出す病なのかもしれない。と考えるようになりました。その頃から、どんな人も、本人の心が自然に動き、「こんなことをしたい、こんな世界を作りたい」と自由に思い、実現できる社会に変えたいと思い始めたのです。

人に映画を見せる仕事をしたい！

私は、昔から映画が大好きで、映画の仕事をしてきて、映画館へ就職という道をたどったわけではありません。しかし、大学卒業後、いわゆる人生の大殺界と言われるような、何をしてもうまくいかない時期が突然やってきて、生涯を捧げたいと思っていた仕事と大切なパートナーを一度に失ってしまう失敗を犯しました。罪悪感に苛まれ、すっかり落ち込んでしまい、私も姉のように鬱になり、本当に前を向くことができなかった時期に、私に人生の門を開いてくれたのが映画館だったのです。

現実から離れた暗闇の中で、いろいろな映画を通して、様々な生き様に触れ、大事なことをたくさん教えてもらい、やがてもう1度、未来を描いてみようと思うことができました。その経験をきっかけに「人に映画を観せる仕事をしたい」と思うようになりました。そして映画館でアルバイトを始めたのです。

自分の本当の望みを振り返る大切さ

その頃ネットで「クレイジーな夢を持った人、集まれ！」という触れ込みの「クレイジーランニングス」という異業種交流会を見つけ、参加するようになりました。それが人生の転機につながります。私の夢は「映画館をつくること」でしたが、誰もが自分のかかげたクレイジーな夢の実現にはほど遠く、「このままではダメだ！何かクレイジーなイベントを企画しよう！」ということになりました。

そして、チャットリソのサイレント映画「街の灯」をバリバリ上映するという企画がはじまりました。「普通の上映会では意味がない、クレイジーな企画をしよう」という話から、「盲目の女性が出てくる映画だから、目の見えない人と一緒に観るバリバリ上映会がクレイジーではないか」ということになったのですが、いくらクレイジーな企画でも、「目の見えない人に映画の話をするなんてクレーンではないか」と思っていた私は、全然喜んでおえなかったらどうするんだ? と不安でした。そこで、実際、視覚障害者の人たちに会いに行つて「この企画について、どう思いますか?」と尋ねてみることにしたのです。

すると、「映画はとても観たいけど、諦めている」「何度か、喜だけでわかるかを試してみたけれど、肝心なところで迷子になってしまった」「副音声のようなものがあれば、目が見えなくても映画が楽しめるのに……」と、映画に対する思いを話してくれました。私は、大きなショックを受けました。怒られるどころか、興味がないどころか、とても観たいのに諦めるしかない現状。映画鑑賞のサポート環境が不備なため、「観たいのに観られない」という現状がありました。

けれども調べてみると、アメリカにはバリバリリー映画館が当時で100館以上もあり、視覚障害者がアシエユーまで書いているのです。「日本は遅れている」、そう思った私は、2001年にCity Lights(「街の灯」の原題から取りました)という団体を立ち上げました。そして「視覚障害者に映画を届けるにはどうすればいいか」に真剣に取り組むようになったのです。それが今の、映画館シネマ・チュゾキ・タバタの設立につながっています。

誰も排除されない映画館という懐の広い空間で、健常者も障害者も、同じようにひとつの映画を共有し、夢をみる事ができる。その体験を通じて偏見や差別のない社会をイメージしてほしいし、映画館



シネマ内観。イヤホン音声ガイドや車いすスペース等を備える

のような、街中のコミュニティスペースで、自然と世界が変わるような化学変化を起こしたい。それが私の夢です。ここまできているんな苦労や挫折がありましたが、「これが自分なんだ、これが私の望んでいるたことなんだ」と思えるものに出会って、本当に良かったと思います。

先生を指す皆さんも、壁にぶつかるともあるに抱いている夢を実現してほしいと願っています。

(談)



シネマ・チュゾキ・タバタ代表 平塚千穂子 Hiratsuka Chikako

1972年生まれ。早稲田大学教育学部教育学科卒業。飲食店や映画館「早稲田松竹」勤務を経て、2001年にバリバリリー映画鑑賞推進団体City Lightsを設立。以後、視覚障害者の映画鑑賞環境づくりに従事。2003年、第37回「NHK障害者福祉賞(優秀賞)」受賞。2016年、日本初のユニバーサルシネマ「CINEMA Chupki TABATA」を設立。その功績が認められ、第24回「レノワ賞特別奨励賞」、平成30年度「バリバリクラウズ賞」、2017年「日本映画ベストリー・ユニバーサルデザイン推進功労者表彰内閣府特命担当大臣表彰優良賞」を受賞。著書に「夢のユニバーサルシネマ」(読書工房)がある。[シネマ・チュゾキ・タバタ http://chupki.jp/or/](http://chupki.jp/or/)

教採の“いま”と“これから”を捉える学習マガジン

Oct. 2020

10

教職課程

“学ぶ”をひらく。

激変の教採トレンドからの新方策

今日から始める！教員採用試験スタートガイド

いまこそ解いておきたい

2020年実施 東京都 教職教養実施問題

スタートダッシュ！

教採学力 ステップアップドリル

自治体別試験 DATA&分析①

付録

教職課程 10月号
Original Diary
2020-2021
夢をかなえる
教採手帳